

令和元年5月26日現在

機関番号：14201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16709

研究課題名(和文)利益と没利益の思想史的研究

研究課題名(英文)Historical study of interest and disinterestedness

研究代表者

藤岡 俊博(Fujioka, Toshihiro)

滋賀大学・経済学部・准教授

研究者番号：90704867

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、西洋思想史における「利益」およびその対抗概念である「没利益」をめぐる議論の展開を調査したものである。本研究は、「没利益」の概念をマルセル・モースが有名な論考「贈与論」で分析した「贈与」のトピックと関連づけるとともに、この主題がエマニュエル・レヴィナスやジャック・デリダといった現代フランス哲学者によってどのように扱われたのかを示した。本研究は、デリダの議論に対しておもに社会学や人類学から提起されてきた反論に哲学の側から応答することで、モースの「贈与論」をより広い思想史的文脈のもとで捉え直す視野が得られたと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで「利益」の概念をめぐる思想史的研究はさまざまな角度から行われてきたが、それに比べて、価値中立的な美的判断という美学的用法を除くと、「没利益」の概念をめぐる包括的な研究はほとんど行われてこなかった。本研究は、この概念を軸に、マルセル・モースの贈与論とエマニュエル・レヴィナスの思想の関連を調査することで、レヴィナスの思想の幅広い哲学的意義を明らかにするとともに、先行研究のなかで通説化されてきたモース受容の解釈の新たな側面を抽出することができた。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to investigate the development of the notions of “interest” and its counter-concept “disinterestedness” in Western thought. We related this latter notion to the topic of “gift”(don) that Marcel Mauss analyzed in his famous essay “Essai sur le don” and we tried to show how this subject was treated by several French contemporary philosophers like Emmanuel Levinas and Jacques Derrida. From the side of philosophy, we responded to the criticism that sociologists and anthropologists had directed toward Derrida, in order to reconsider Mauss’ “Essai sur le don” in a broader context of the intellectual history.

研究分野：思想史

キーワード：利益 没利益 贈与 レヴィナス デリダ モース

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) これまでの西洋思想史のなかで、「利益 (intérêt)」の概念はおもに社会思想・政治思想の分野で多様な角度から論じられてきたが、その対立概念である「没利益 (désintéressement)」については、価値中立的な美的判断という美学的用法を除くと、包括的な研究はほとんどおこなわれてこなかった。

(2) 「没利益」の概念とも関連が深い「贈与 (don)」の概念は、とりわけモースの論考「贈与論」の継承をめくり、現代のフランス思想においても大きな役割を果たしている。しかし、「没利益」の概念を用いて倫理思想を提出しているレヴィナスについて、「贈与」と「没利益」の両概念の関連を論じた研究は見られない。

### 2. 研究の目的

(1) 「利益」の概念の思想史を調査したうえで、そこから単なる「利益」の下位概念に収まらない「没利益」の概念が抽出されるかどうかを検討し、その哲学的意義を明らかにする。

(2) レヴィナスの「没利益」の思想が、「利益」の思想史全体に対置されうる視点を提出しえているのかを、内在研究および関連する論者や文脈との対照を通じて明らかにする。

(3) 一つの個別主題として取り扱われてきたモースの「贈与」の主題が、「利益」および「没利益」の思想史というより広い思想的文脈にどのように接続されうるのかを明らかにする。

### 3. 研究の方法

(1) 「利益」概念の思想史的研究を整理し、これまでさまざまな文脈で個々に記述されていた「利益」概念の多義的用法をまとめ、その通史的な展開を明らかにする。この思想史的調査にもとづき、特に「没利益」の概念に関連が深いと思われる論者の議論を取り上げ、当該概念の析出可能性を調べる。

(2) モースの「贈与論」を思想史的に位置づけるために、最新の一次資料および専門研究を調査し、「贈与」の概念が「利益」および「没利益」の思想史とどのような関連を有するのかを検討する。

(3) レヴィナス、デリダらにおける「贈与」および「没利益」の概念を調査し、これらの現代フランス哲学の潮流と「利益」の思想史との関係について考察する。

### 4. 研究成果

(1) 「利益」概念を思想史的観点から整理したうえで、それを踏まえた「没利益」の概念の析出のための調査をおこなった。特にフランスのモリス主義者であるラ・ロシュフコーの言説を分析し、「没利益」を「利益」の否定ではなく単なる偽装とみなすことで「没利益」を一般的な「利益」概念のなかに組み込もうとする見解の理論的筋道と歴史的展開を調査した。

(2) 現代フランス哲学における「没利益」概念の研究として、デリダが『時間を与える』で展開しているモースの「贈与論」読解の再検討をおこなうとともに、レヴィナスにおける「贈与」の主題をモースの議論と接続可能かどうかを検討した。その過程で、一見すると「贈与論」の辛辣な批判と解釈されうるデリダの議論が、むしろ時間の贈与という積極的な贈与の可能性を「贈与論」そのものに即して提示していることを示したうえで、「エコノミー」と区別される贈与の構造および贈与のアポリアが同様に見られるレヴィナスの思想においても、贈与が「隔時性」という時間として考えられていることを明らかにした。モースの人類学的議論と、デリダおよびレヴィナスの哲学的議論を接続するとともに、デリダの議論に対しておもに社会学や人類学から提起されてきた反論に哲学の側から応答することで、「贈与論」をより広い思想史的文脈のもとで捉え直す視野が得られたと考えられる。

(3) モースが「贈与」概念を提出するにあたって参照した可能性のある、経済をめぐる社会的分析についての歴史研究をおこなった。モースの「贈与論」は当該分野の記念碑的著作と目される一方で、それが経済社会分析において占める歴史的な位置づけはいまだ不明瞭なままにとどまっている。そこで本研究はモースも寄稿している『社会学年報』を調査した。なかでも、『年報』グループの一人である経済学者シミアンが執筆した利子や資本をめぐる研究の書評の分析によって、「利益」/「没利益」や商業交換/贈与と交換といった「贈与論」と同一の関心が両者のあいだで共有されていることが明らかとなった。同時に、モースとの関連が考えられる同時期の経済思想家の著作を調査し、「贈与論」と比較しうる論点の析出をおこなった。

(4) 現代フランス哲学における「没利益」概念の研究に関して、その中心人物であるレヴィ

ナスの思想について、次の研究をおこなった。

先行研究において強調されてこなかった作家ロレンスとの主題的な関連を、公私にわたってレヴィナスとの関係が深かったヴァールの著書の分析を媒介とすることで明らかにした。

レヴィナスがロシア語でつづった青年期の詩および散文作品を分析することで、これまでほとんど知られていなかったストラスブル大学時代のレヴィナスの関心の所在を明らかにするとともに、のちの哲学著作にまで通底しているいくつかの主題がすでにこれらのロシア語著作に現れていることを示した。

レヴィナスの後期の主著『存在するとは別の仕方であるいは存在の彼方へ』および『貨幣の哲学』を分析対象とし、レヴィナスがスピノザやハイデガーを介して「内存在性」の価値論を批判する点に着目することで、レヴィナスが最晩年に提出する「没利益」の概念を広範な哲学史のなかに位置づける可能性について検討した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

藤岡俊博「レヴィナスとロレンス 異教的超越」、『京都ユダヤ思想』、第9号(2)、2019年刊行予定(掲載決定)

〔学会発表〕(計2件)

藤岡俊博「レヴィナス青年期のロシア語著作について」、レヴィナス協会、2018年

藤岡俊博「レヴィナスとロレンス 異教的超越」、京都ユダヤ思想学会創立10周年記念東京大会、2017年

〔図書〕(計4件)

ジェラルド・ベンスーサン、渡名喜庸哲、藤岡俊博『メシア的時間』、法政大学出版局、2018年、324頁

ジャン=リュック・ナンシー、ダニエル・コーエン=レヴィナス、渡名喜庸哲、三浦直希、藤岡俊博『レヴィナス著作集3』、法政大学出版局、2018年、455頁

ロドルフ・カラン、カトリーヌ・シャリエ、藤岡俊博、渡名喜庸哲、三浦直希『レヴィナス著作集2』、法政大学出版局、2016年、424頁

齋藤元紀、澤田直、渡名喜庸哲、藤岡俊博ほか『終わりなきデリダ』、法政大学出版局、2016年、406頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6 . 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

### (2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。